

改訂新版 硯友社の文学運動

福田清人著

博文館新社

改訂
新版

硯友社の文学運動 ©一九八五

昭和六十年九月三十日 発行

定価 五八〇〇円

著者 福田清人

発行者 大橋一弘

発行所 株式会社
博文館新社

〒一一二

東京都文京区小石川二一四六
電話 (〇三)八一—四七二一
(代表)

印刷・製本 凸版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取替えいたします。

著者略歴

福田清人（ふくだ・きよと）

明治37年長崎県生れ。昭和4年東京帝大
国文学科卒。第十次「新思潮」同人として
文学生活に入り、日大芸術科、実践女子
大学、立教大学教授も勤めた。

現在—日本文芸家協会名誉会員、日本近
代文学館常任理事、東京都文学博物館運
営委員、日本児童文芸家協会会長。

著書—「福田清人著作集」全3巻（冬樹社）
「写生文派の研究」（明治書院）「咸臨丸
物語」（ぎょうせい）その他多数。

ISBN 4-89177-903-9 C0091

自序

ここに尾崎紅葉等の『硯友社の文学運動』の改訂新版を上梓する機会をえた。

この初版は昭和八年二月、山海堂出版部より、藤村作博士編「明治文学研究」の第一編として出版された。それから既に半世紀以上の歳月が流れた。

今日近代文学研究はまことに盛んであるが、その源流ともいふべき明治文学会が当時結成されて月例の研究會を持ち、定期刊行物も発行されていたが、『硯友社の文学運動』も、その氣運の中から出版された。その草稿は、私が昭和四年春、東京帝大国文学科の卒業論文に、その後四年若干成長した眼で、新しい資料も加えてまとめたものであつた。そしてその「あとがき」には次のようなことを記している。

「硯友社の文学の展開を眺めることは、明治の前半期の文学の過半の分野を眺めることだ。私はここに、その中から、集團としての硯友社の一団の動向を浮彫にするとともに、またその内部における作家の独り独りの姿を知りたいと思つた。生彩あるその動きを描きながら、彼等の歩んだ當時の、時代の眼に映つたところを知りつつ、一方今日の私の眼から批判して行きたいと思つた。」

そして当時、愛読していたブランデスの『文学主潮史』や、クロポトキンの『露西亜文学の理想と現実』の読後の感動を挙げて、「ここに私はできるだけ生々しい具象性を記録しつつ、そこより自らに与えられた強弱の感動を記して、硯友社作家の歩みを批判したかった。」とも述べている。

私はその頃、同人雑誌に関係して、研究より創作にうちこんでいた。硯友社作家の據った「我楽多文庫」は同人雑誌の先駆である。同人たちのさまざまな姿勢に、私の據っていた同人雑誌の同人たちを連想してもいたのであった。

さて、この初版が出てから十七年の歳月が流れて、昭和二十五年五月、改訂増補版を巧芸社から出した。巧芸社には名著木村小舟の『少年文学史』を出した童話春秋社の別の看板もかかっていた。私はその改訂版の序中に、初版出版当時を回想して「意外なまでの反響があつて、明治文学研究の先駆者岩城準太郎氏が『東京朝日』に長文の批評を書いてくれたほか、先輩湯地孝氏が『読売』に、片岡良一、塩田良平、藤田徳太郎、伊藤整氏等が方々に批評してくれた。『文芸春秋』にも匿名であつたが、千葉亀雄氏と思われる人が、『時事』に十和田操氏がかなり長く批評してくれた。ここに新しい版を出すに際して、その後続々とでた研究や資料を私の眼のふれる限り考察のなかに入れ増訂した次第である。」

とも記しているが、好意ある批評で、半世紀前の若い私を喜ばせてくれた上記の先輩友人すべて

今は故人である。

さて、この改訂新版を出すことができるのは、昨、昭和五十九年夏、博文館新社社長大橋一弘氏
がたまたま、巧芸社版の『硯友社の文学運動』を入手し読まれて、拙宅にみえられた。その近代文
学史上の先駆的な功績にかかわらず、忘れられようとする硯友社作家の再認識のためにも拙著の新
版を刊行したいとのことであった。

話しているうち一弘氏は、硯友社同人の一人で、その人柄が認められて、後に博文館の創始者大
橋佐平館主の婿となった大橋乙羽（旧姓渡部）の孫に当たる人であることが分った。

乙羽は博文館の支配人としても活躍し、文壇の発展に寄与したが、明治三十四年外遊後病死した
のであった。

明治二十年創業の博文館は近代文学に貢献のあった「太陽」「文芸倶楽部」「文章世界」「新青年」
「少年世界」等の諸雑誌、或いは単行本の出版社として出版界に大いに雄飛したが、戦後は日記出
版のみに限られた。

一弘氏は、順次一般出版への志向を持ち、先に館とゆかり深かった巖谷小波著・巖谷大四編『桃
太郎主義教育』の話』を刊行されたが、ここに同様なゆかりを持つ、尾崎紅葉等の『硯友社の文学
運動』をとりあげられた。

序 自

私は、この機会に若干の改訂を試みまた現代表記に改めた。そしてゆくりなくも昭和六十年は、硯友社結成の明治十八年から百年に当たることに気づいた。偶然ながら、硯友社結成百年目に当たるこの年に、本書の蘇ることを、ありがたく思う次第である。

なお上梓まで校正その他星ノブ氏をわずらわした事も感謝する。

昭和六十年初夏

福田清人

硯友社の文学運動 目次

序 説	五
-----	---

第一章 硯友社成立の背景	一四
--------------	----

一 当時の社会背景	一四
-----------	----

二 当時の文学背景	一九
-----------	----

第二章 硯友社の成立とその組織	三〇
-----------------	----

一 硯友社の成立	三〇
----------	----

二 硯友社の組織	三九
----------	----

三	硯友社作家の発表機関……………	四八
四	成立後の展開区画……………	五五
第三章	硯友社の展開 その一……………	六一
一	習作期……………	六一
二	習作期に於ける傾向……………	六七
三	美妙の進出……………	八七
第四章	硯友社の展開 その二……………	一〇六
一	進出期……………	一〇六
二	『小文学』『江戸むらさき』『千紫萬紅』の発行……………	一一四
三	紅葉の作品……………	一二七
四	その他の同人の作品……………	一六六

五 硯友社と俳句.....	一九四
---------------	-----

第五章 硯友社の展開 その三.....	二〇七
---------------------	-----

一 活躍期.....	二〇七
------------	-----

二 観念小説・深刻小説の考察.....	二一八
---------------------	-----

三 眉山の作品の発展.....	二二八
-----------------	-----

四 柳浪の作品の発展.....	二四一
-----------------	-----

五 紅葉及びその他の同人.....	二四九
-------------------	-----

第六章 硯友社の展開 その四.....	二六四
---------------------	-----

一 解消期と紅葉.....	二六四
---------------	-----

二 その他の同人の動静.....	二九五
------------------	-----

第七章 硯友社作家の態度	三二六
一 文学に対する態度	三二六
二 自然に対する態度	三二四
三 社会に対する態度	三三一
四 女性に対する態度	三三八
結 論	三五三
硯友社年譜	三六五

序 説

硯友社とは、改めて記すまでもなく、明治十八年五月創刊の『我案多文庫』を機関雑誌として、その初めより、或いはその後より、これに参加した尾崎紅葉、石橋思案、巖谷小波、川上眉山、大橋乙羽、広津柳浪、江見水蔭、及び中途にして文筆を捨てた丸岡九華、又やがてこれより脱退した山田美妙を主なる同人として結成され、而して明治文学前半期の主軸を形成した文学的結社である。

その結社による文学運動は、もともと一つの明らかな文学的所信、新たな文学観を抱いて、その共通の旗の下に集まり、意識的に結合し、集団の力をもって進んだものではない。その初め、単に道楽的な筆のすさびに打ち興じた、ささやかな文苑より次第に成長し、やがて文学者としての自覚より、社会的な認識をも得んがため、即ち文壇登場のために、個々の力を合せて進出しようとした出発が、内には結合されて、単なる友人関係以上のものとなり、外には彼等の進出、存在をさまたぐるものと抗争しつつ、自らの地位を確保しながら、明治文学前半期の史的展開の頁を、彼等の活動によって厚く占めた。

硯友社の生まれ出る前後の社会状態、及び文学界の事情については、やがて述べるが、当時の新

文学に対する気運に乗じて、坪内逍遙、二葉亭四迷、幸田露伴、森鷗外など独力、文学的処女地の茨を切り開いている者もあり、而して彼等は優れた先駆者であつたが、時流が、ようやく新文学を迎えるに、寛かであろうとしつつあつても、なお、古風な伝統と観念の翳が黒く世間を支配していた時代に、孤立的に一人一人歩む事は、かなり困難なものがあつたであろう。集団の力はかかる折その効果を個々の総和以上に持つものである。そうした折から、硯友社の参加者は、少数とはいえ、一個の集団結社として、その存在理由を持ったのである。分散した個々であつたなら、時の嵐にひとまりもなく吹き散らされたであろう分子も、集団的に結成されることによって、勢いづき、よく文学的荒野の中に、その芽をのばすことを得たものがあつた。

顧みるに、文学運動上の結社は、日本文学史上にもいくつも見られるが、それ等は短歌や俳句を作る人々に多かつた。然したとえば短歌の「家」の如く、明確な歌論、文学観を掲げ、それに従つて積極的な働きかけを、対社会的、対文学的に及ぼすというものでなく、ただ一家の歌風を伝統的に墨守し、之を将来に伝えるにすぎない、一個の權威に裏付けられた消極的存在で、それに名を連ねる一家の人々は、それにより体面を保ち、経済的にも生存してゆくのである。例えば中世の藤原定家の後、分派した二條家、京極家、冷泉家の如きはその例であろう。

また近世の俳諧における、貞門、談林、蕉門などにも、結社性が見られるが、それ等は個々の人

が同じ文学への見解で集まって、その地位を確保したというより、松永貞徳なり、西山宗因なり、松尾芭蕉なり、一人のすぐれた芸術の師を中心として、集まった師弟関係の固い結合で、明治文学以後に見られる新しい文学主張のための結社と、本来の性質をやや異にするもののように思われる。即ち、芭蕉においては、そのため、正岡子規が『芭蕉雑談』で、これを皮肉つて、

「その多数の信仰者はあながちに芭蕉の性行を知りてそれを慕ふといふにあらず、芭蕉の俳句を誦してそれを感じといふにあらず、唯々芭蕉といふ名の自ら尊くもなつかしく思はれて、かりそめの談話にも芭蕉と呼びすつる者はこれ無く、或は翁と呼び、或は芭蕉翁と呼び、或は芭蕉様と呼ぶこと恰も宗教信者の大師様、お祖師様などと称ふるに異ならず。甚しきは神とあがめて廟を建て本尊と称して堂を立つること、是れ決して一文学者として芭蕉を観るに非ずして一宗の開祖として芭蕉を敬ふ者なり。」

といった風に、その門の流れを汲む狂信者たちが狂態を示すに至つたものである。狂信者たちは、かく偶像を崇拜すると共に、自らは偶像の光の下にある選民たることを他に示し、もって、功利的に自己の地位を確保しようとしたものといふことができよう。

かくの如く、かかる傾向を持つ前者は、すでに占められた地位を保持するための努力であり、明治文学以後に見る後者は、今よりその地位を占めようとする努力に重心がおかれる。

明治、大正、昭和を通じて文学的結社を構成する同人の機関雑誌により、一つの文学運動を起して、或いは文学理論により、又は作品行動によつて、その主張する文学をひろめ、従つてその文学の価値によつて、主張者等自らも、新しく文学者としての社会的な認識を勝ち得ようとする努力は、無名の作家のとり方である。硯友社はこの意味における、小説の分野においての文学結社、及び文学運動のこの国における最初のものであつたと思う。硯友社を最初にして、こうした運動は次々に起つた。即ち続いては明治二十六年一月創刊の『文学界』の若やかなロマンチズムの情熱に彩られた群がある。北村透谷、馬場孤蝶、島崎藤村、平田秃木、星野天知、戸川秋骨、同残花はここに結合された。自然主義運動は、あまりに範囲が広く、統制のとれた結社の統一の中心的凝固性が散漫ではあるが、機関誌的に言えば第三期の明治三十九年一月発刊の『早稲田文学』、同じく三月創刊の『文章世界』等がその中心となつたともいえる。かくて又、若い貴族的な新しい理想主義者をもつて結ばれた明治四十三年四月創刊の『白樺』は、同人雑誌より明確な方向を掲げて進出した典型的な例である。その後も大正期に入つて、豊島与志雄、山本有三、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、松岡譲等を生んだ新現実主義文学ともいふべき第三次、第四次の『新思潮』や、大正末期の固定しかけた表現形式に、鮮魚の様な潑刺さを持ちこんだ横光利一、中河与一、川端康成等で代表されて新感覚派と称せられる『文芸時代』、又その視野を階級において、戦闘的な文芸陣を布いた無産

派の文学結社、これに對して、あくまでも芸術を政治の支配下におくをいさぎよしとしない、幾つかの芸術派結社等も續いて起伏した。

然しながら、こうした同人雑誌の先驅者であつた硯友社の作家は、前に述べた通り、はつきりとした主義、芸術觀の下に結成されたのではなく、ただ作品主義をもつておし進んだのである。その事は同時に明治十八年坪内逍遙の『小説神髓』によつて初めてまとまつた文学論を見たように、文学の理論的な荒地であつたその時代を念頭において、考えるべきである。文学理論によつて、集められなかつたにせよ、その作品行動によつて共同進出を計つた硯友社に、田山花袋は、

「三十年間、私の見て來た日本の文学者の交遊では、紅葉を中心にした硯友社が一番賑かで面白さうであつた。かれ等は一緒に飲み、語り、且つ伴れ立つて旅行した。しかしその交遊なり旅行なりが、興味を中心にしたもので、互に啓発したり、互に励まし合つたりするものでなかつたことは事實である。かれ等の旅行は駄洒落と道楽と興味との旅行であつた。これが即ちその交遊が面白さうに見えたり思はれたりするところで、単に外面的に過ぎなかつたのである。眉山君などは、後にはその交遊の愚なることを度々私に滴した。」（註一）

と局外より嘲笑的な言葉を述べ、同人自らの中にも江見水蔭のように硯友社は、文学運動のための團結ではなく、社交的機關——平つたく言えば遊び仲間——進んでは兄弟關係であつたことを繰

り返し、

「閥とは何だ！然う叫ばずにはゐられないのだ。党同伐異、それを我等が試みたらうか。それは党を作した。紅葉を中心に多数の文士は集つた。硯友社といふ団体は形ち作つたが、単にそれは交遊機関に過ぎなかつた。他を害するやうな事は決して仕なかつた。味方を拵けて、味方ならざる者を抑へるやうな、そんな賤しい事は一ツもしてゐないのだ。我等は攻撃すべき武器——批評論議を一切持たなかつた。自己が攻撃されても隠忍してゐた位だ。」（註2）

と強く言う。このように硯友社を單純に社交機関と見る事は妥当であらうか。後年に至つて、結社の内部の付随的心理として、こうした傾向に移つて行つた事は認めねばならないが、両者の視点はいささか感情に走りすぎている気がする。また局部にのみ注がれ過ぎてゐる気がする。我々はその二十年に亙る展開の跡を冷静に客観しなければならぬ。その結社が共通のイズムの下になつた事で、このように見られる傾向があつたとはいへ、その日常生活に、時として見られた遊戲的な営みが、硯友社作家のなすすべてであつたらうか。その他愛のない談笑の中に自ら心に抱く文学觀をもらさなかつたであらうか。彼等の口よりもれるものは駄洒落や、うがちや、町角の煙草屋の娘や、若い女の噂ばかりであつたらうか。そうした談笑ばかりでなかつた事が、たとえば、

「硯友社としては、社中の著作に対して、嚴密な批評会を数回催した。それは紅葉が一時本郷森